

〈 書評論文 〉

保存する社会

—「怒りのヒロシマ」を手がかりにして—

米山リサ『広島——記憶のポリティクス』
(岩波書店、2005年)

濱田 武士

1. 本稿の問題関心と本書の意義

戦後60年以上が経過し、原子爆弾の被害を直接体験した人はもとより、それを同時代に経験した人も少なくなっている。その一方で、世界で唯一原子爆弾が投下され、また戦争放棄を憲法に明記した日本は、国内からも諸外国からも国際的な場で一貫して独自の役割を果たすことを期待されている。近年のこうした状況のもとで、人びとが原子爆弾の被爆や被害にあらわされるような負の記憶をどのようにとらえようとしているのか、という点を本稿の問題関心とする。

このような問題にアプローチするにあたり、荻野昌弘による次の指摘が参考になる。荻野はそうした負の記憶にたいする人びとの両義的な対応として、一方では忘れてしまいたいという思いが破壊や撤去という結果へ至らせ、他方では、記録したり表現したりしたいという思いが復元・再現や保存という行為に向かわせる（荻野 2000：pp. 201-202）、ととらえている。広島原爆ドームが遺産として保存される理由を、戦争の悲惨さを忘れないためだとするのが今日の主流となっているとらえ方だが、この指摘はそれが原爆投下以降の歴史上の一時点に生じた見方でしかないことを示唆するものである。たしかに戦後、原爆ドームは、これを戦争の悲惨さを忘れないためという動機をもった立場から保存の対象とされるようになった。しかし、実際には過去に原爆ドームを破壊や撤去の対象とする立場も存在していたのである。本稿が取り上げる『広島——記憶のポリティクス』の著者である米山も、広島を原子爆弾の被爆や被害との関係でとらえる現在主流となっている見方を、歴史的な一時点を起点として構成された記憶としてとらえなおそうとしているという点では同様である。

これまで、原子爆弾の被爆や被害の側面に注目した研究は、被爆者への聞き取りを方法とするものが主だった。また、広島復興の側面に注目した主たる研究は林雅孝らによる『戦後広島都市診断』（1991）がある。これらは人類にたいして唯一原子爆弾が投下されたという歴史的事実を、後世の人びとに伝える記録的な意義を担おうとしたものである。こうした従来の研究について、米山は「世紀末に急速に広まり、世界的規模の文化潮流となった」ものにとらえ、その「追憶のプロセス」

(p.6) を考察の対象とする。その点で、彼女は、記憶の忘却という危機感に基づいて行われたこれらの研究が、すでに前提としていて問い直すことのない事例と歴史性の結びつきを、改めて考察し相対化する観点に立つ。

本書はそもそも1993年に「広島語りと記憶のポリティクス」として提出された博士論文をもとにしている。これをもとにした“*Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*”が1999年に出版され、2005年に日本語で出版された。

こと広島の被害や被爆の記憶にかんしては社会で主流となる見方が存在し、それ以外の見方が不当にないがしろにされているという現状にたいしては、評者は本書と問題関心を共有する。たとえば米山は「戦後体制下で再構成された政治主体としての『女性』は、男性知識人と同じかたちで悔恨共同体に包摂されていたはずがない」(p.254)と主張する。これは、政治哲学者の丸山真男による悔恨共同体概念が、戦後の社会と文化の再構築に参加した、男性を主とする政治主体を指していたことにたいして、女性のナショナルな政治主体が別様に喚問され作り直されたことを示す。それは「『日本人女性』は、ほとんどの男性と異なり、国家の敗北という犠牲を払って解放された『犠牲者』として想起されていた」(p.254)ことを検討することによって行われる。こうした新たな事実を目を向けさせるアプローチは、先に取り上げた荻野の示唆と同じような意義を持つ。つまり、現実世界が、対立する立場をとる者同士の闘争を背景に成立している、という事実を目を向ける必要性である。

2. 本書の問題意識

本書の目的は、「国家のそう遠くない過去の忘却を生み出した戦後のプロセスを解きほぐすこと」(p.5)である。そのため米山は、はじめに広島平和記念公園建設計画の事例を取り上げる。広島に作られた「中心的な記念空間」の平和記念公園は戦後、広島で「平和国家を賞賛する」ものとされてきた。ただ、これを設計した丹下健三は戦時中、富士山の麓に平和記念公園と同じような構図の「帝国日本を祝福する」神道式記念ゾーンを設計していた。こうした事例を振り返ることから米山は、戦時中の社会的・文化的要素がこのイコニックな場を通じて戦後に継続されていることをみるとともに、それにもかかわらず、実際には社会の主流でこのような大日本帝国の記憶が欠如していることに関心をよせる。

米山は、そうした記憶の欠如が現実世界で生み出される原因として、その起点に西洋と比較するマルクス主義者や日本の進歩的伝統を強調する者たちが位置しているとみなす。日本は、当時の知識人にとって近代化に遅れた国民国家であった。したがって近代化論こそが、当時の日本の社会科学が長い間議論してきたことだったのである。それは長崎と広島への原爆投下を一对のものとして扱われるべきであるという見方につながった。その前提は二つの都市が同じ国民共同体に属し、その記憶を共有していることであるが、同時にそのような見方がその前提自体を自然なものとしている、と分析する米山は、被爆地に共通する本質的な歴史的アイデンティティと見えるものを所与のものとはおかない。なぜなら、米山が目的とするのは、広島の過去と現在の表象を生産するさまざまな力を解明することだからである。

本書においては、記憶という語は歴史という語の対立概念としては定義されていない。これまでたとえば社会史研究の一部で、記憶は、普通の人びとの過去の体験についての純粹で真正な知としてとらえられ、それにたいして歴史は、権力の所産として記述されてきた。こうした考えにもとづけば、

歴史と記憶の関係は対立していて、過去についての知にかんする二つの概念の間には決定的な相違があることになる。だが、こうした従来のとらえ方とは異なり、米山は、歴史のみならず記憶も、つねに権力の行使の中にまきこまれており、抑圧の要素を付随させているととらえる。よってここでの記憶とは、「過去についての公式の権威ある記述が創出される過程で、深く歴史のうちに埋め込まれ、絶望的なまでに歴史と結託してしまっているもの」(p. 37) とされる。

このような観点から、米山は、一見すると確固として存在しているかに見える歴史を、提示された記憶の一つとしてとらえる実践が、既存の知の秩序に批判的態度をとり、根本的な懐疑の目を向ける助けとなることを明らかにしてみせる。

3. 本書のアプローチ

序章にあるように本書は、「ある社会的コンテキストにおけるローカルな声と、別のコンテキストにおける関わりとを仲介することを試み」(p. 55) る。そのさいに、米山が記憶という概念に着目するのは、根本的に、過去を知ることと過去についての回顧が起こるコンテキストが切り離すことができないものだからである。こうした観点からすれば、これまでの研究でとりあげられた対象は、どれも原子爆弾による被爆の事実と結びつけられる文脈を構成するために用いられていることが見えてくる。そこで米山は広島という観点を提示するのに先立ち、「過去の出来事や経験が、言説に先行してそれ自身やその意味を自動的に明らかにできるという考えを、私たちは留保せねばならない」(p. 37) と念を押す。

このように記憶を歴史と結託してしまっているものとして考えてしまうと、過去の探究を行うことそれ自体が困難であるかのように感じられるかもしれない。しかし米山は経験的事実を拒んだり、体験的真実を否認したりする必要はないとする。なぜならヴァルター・ベンヤミンが歴史について明確にした、時間の進行の連続性と一貫性を想定する既存のマルクス主義的、ブルジョワ的歴史叙述と、変革の可能性を照らし出す助けとなる歴史記述は決定的な相違がある、という考察に依拠することで、この探求は可能になると考えるからである。

以上の考えのもと、米山は、これまでの研究によって再構成された記憶を、あらためてとらえなおす地点に立つ。こうして行われる研究の目的は「歴史上の逃された機会、果たされなかった約束、さらには実現されなかったが異なる現在を導いたかもしれなかった出来事を取りもどす」(p. 40) ことである。それにしたがえば、これまでの研究が記憶を構成するためにその文脈に位置付けてきた事実はいったん事実そのものとして、つまりひとつの出来事とみなされることになる。このようなアプローチこそが、米山が批判の対象とする「普遍的歴史を統治する空虚で均質的な時間の画一性と不変性」(p. 40) に抵抗する手段になるのである。

4. 本書の内容

第一部「記憶の地図作成法」は、第1章において廃墟が位置する都市で広島が記憶が馴致される過程における空間の政治を考察する。再開発計画やイベントが新しい市のイメージを作るために執り行われることを、フラワーフェスティバルを例に取り上げながら示す。こうした広島「の」[「明るい」] 新たな記憶となる景観の生産は、記憶の再定義をともなっていた。すなわち、それは廃墟、つまり被爆建

物や原爆遺跡と呼ばれるものが、撤去や取り壊しの対象とみなされうることを含意していた。これにたいして第2章では、被爆者や市民たちの行った抵抗運動に目を向ける。ここで事例として取り上げられるのは日本銀行移転反対運動、原爆ドームの恒久保存を求めるキャンペーン、また、広島赤十字・原爆病院の保存運動である。こうした出来事から、原子爆弾による被爆や被害を忘れさせてしまうような今日の物理的環境においても、被爆建造物に注目することにより、人びとの記憶が呼び覚まされうることを示される。つまり、これらにたいする保存運動は、それがなければすっかり消失してしまったかもしれない記憶や感情を、必然的に呼び起こす契機となったということを検討する (p. 115)。

第二部「ストーリーテラー」は、第3章において被爆者による証言を取り上げる。80年代に広島の生存者の会が結成されたのは、そもそも原子爆弾による破壊からの生存者たちが、広島の壊滅についての個人的な記憶を公衆に伝えることを切迫した問題であると考えたことによるものだった。それは被爆当時の惨状というものをいかにして説明するかが追及されるはずのものであった。しかしながら、これらは平和や反核運動といった当時の反体制的言説パラダイムの中で真実のレジームに従属させられたのであった。このようなことについて証言活動の制度的コンテクストと、当時にとりわけ認識されるようになった言説の転換について検証する。第4章は、米山がこれまで出会った人びとの語りの一部を取り上げる。ここで紹介される人びとから、過去と現在を知るためのヘゲモニックな方法を動揺させ、時にはそれに挑戦しさえしているような、生き残りの人びとの証言活動と空間戦術に特有のあり方を考える (p. 171)。

第三部「記憶と位置性」は、韓国人慰霊碑移設論争と女性についての言説に注目する。第5章は、1990年に広島市が、平和記念公園の西の境界を画する川を渡ったところに設置されていた韓国人原爆犠牲者慰霊碑を、公園内に移設しようと提案した際に生じた論争を取り上げる。その慰霊碑は1970年に、原子爆弾によって殺害された日本の植民地被支配者にささげられ建立された。1986年に巡礼にやってきた在日第一世代の活動家と支援団体は、これを平和公園内に建てさせなかった広島市に抗議をし、公園内に移築するか、もしくは新しい碑を公園内に建立するかを要求した。これにたいして広島市は理由を挙げてこの要求にはしたがわずそのままにしてきたが、1990年に突如として移設を歓迎すると発表した。その背景には、アジア諸国からの訪問者による、慰霊碑の周縁的位置にたいする非難の声があがったからであり、当時、広島市はアジア大会などを主催することから、「国際友好」を促進しようとしていた。そしてそもそも、こうした問題は、広島市当局によりもたらされ、また解決されるはずのことがらであったが、主流メディアの報道により、あたかも韓国朝鮮人こそが、この問題の解決に責任を負うものとしての役割を担っている当事者とみなされた。米山は、このような移設論争を検討することにより、「いかにして韓国人慰霊碑が日本の植民地の歴史に関する論争的なもろもろの表象が系統立てて述べられる場でありつづけることができたのか、そして、それによって、ローカルな共同体の未来に関心をいさぐ人びとに、民族や国民の境界を超えうる新たな提携、問い、展望を示したのか」(p. 217)を問う。

第6章では、フェミニズム研究という観点から、かつて排除されていた領域に、ジェンダー化され国民化された集合体としての「日本人女性」が、一括的な公民権の獲得を経験していた (p. 254) ことを戦後変革に支配的であった歴史の語りを通じてとらえなおす。そのために米山が注目する事例は、憲法への女性参政権の導入、原爆乙女、チェルノブイリ事故である。そして新たに、女性の過去を女性に属する過去として書き直すことが、男性と女性の本質的差異と信じられてきたものを打破で

きることであるのかどうかを問う (p. 282)。

5. 「怒りのヒロシマ」

本書のために書かれた「日本語版への序文」は、原著書の内容を対象化する観点に立って、米山がどのような動機から、何を明らかにするのか、あるいは何を試みたのかについて言及している。つまりこの序文は、2005年に日本語版が出版された時点において米山が行った、本書をいかなる観点から読むのかについての一つの提案であり、そこに反映されている米山の問題関心を知ることによって、本書で取り上げられた内容をより詳しく検討することができるだろう。この「日本語版への序文」で、米山はこう書いている。

かつて、広島市の被爆の記憶は、「怒りのヒロシマ」として表象された。それは今、広島のどこにあるのだろうか。明示的な記号としてのヒロシマに内在しているはずはない。それは、おそらくどこか遠いところから、遅れたものとしてやってくるにちがいない。(p. xi)

原子爆弾による被爆直後の広島市にいた人びとは、たった一発の爆弾によってそれまでの日常生活から一瞬にして悲惨な現実の中に巻き込まれることになった。たしかに日本は戦争を行っており、全国各都市で連合国による空襲が行われていた。ただこれほどまでの破壊力を持った爆弾が、たとえ戦争を行っている敵ではあるにせよ、同じ人間であり、しかも一般市民である自分たちの頭上に投下されたということを、被爆者はどのように考えただろうか。その問いを考えるうえで、米山がこの序文で明示している「怒りのヒロシマ」は大いに参考になる。つまり、そうした観点からすれば、市民は被害を生みだした主体に対し、また戦争を行った日本に対し、怒りや恨みの感情を抱いたということ推測できる。付け加えていえば、このことは同じように原子爆弾を投下された長崎の人びとにとっても、またそれ以降や今日においても行われている戦争に巻き込まれる市民すべてにとっても、同様の状況に置かれた場合には共通して浮上する感情であろう。しかし、戦争の被害にあった直後ならばそうした感情が生成したもの、都市が復興するにしたがい、その感情は薄れていく。こうした現実にたいし、本書は問題関心に続けて以下のように言う。

ヒロシマが廃墟と化しているという認識は、目前にある知を疑い、隠蔽された知の存在を示唆し、従来とはちがった問いを問うことを可能にするだろう。そして平板化・凡庸化した記号にあらたな意味を吹き込むだろう。本書の原典のタイトルにある「痕跡 (trace)」という言葉には、以上のような思いが込められている。(p. vii)

米山は今日の広島の実現を見るときに、被爆直後に広島が廃墟となった様子を重ね合わせる。その様子とは、被爆した人びとが抱いた感情の噴出する現実である。そして今日の広島とは、本書で取り上げられる、記憶のポリテクスによって構成された認識によってとらえられる現実である。米山は被爆直後の現実と、今日の広島の実現にどのような論理の相違があるのかを検討するのである。

6. 原爆ドームとその周辺への破壊の記憶の封じ込め

また、米山は、「日本語版への序文」において、「記憶の政治」というパラダイムが80年代の文化思想や批判理論の動向に促された歴史哲学や社会分析の視座の一つであったと述べている。そこにあるのは、70年代から80年代を起点として行われた被爆や被害の記憶の研究が大文字の歴史のように権威を帯びつつ社会の主流となる見方を形成し、「反核平和の言説の凡庸化に拍車をかけ、知の回収と馴到を生んできた」(p. v) という認識である。こうした時代状況であったがゆえに、本書を書くことは、その時代特有のイデオロギーを問い直さずに過去を表象しようとする実践への批判を意図していた。

では米山による「記憶のポリティクス」というパースペクティブはどのような知を生み出すことにつながるのか。言いかえれば、現在、社会において主流となっている見方が存在するという現実を、どのようにとらえなおそうとするのか。

「ヒロシマが廃墟と化しているという認識」をそのまま投影することができるものとして、原爆ドームは、広島におけるその典型的な存在である。第2章「廃墟の記憶・記憶の廃墟」において取り上げられるのは、原爆ドームの永久保存のために1989年から90年にかけて、人びとの熱意から募金活動が行われたという事例である。このような取りくみが行われたことは、広島市にとって原爆ドームのみが平和記念公園や原爆資料館とともに、適切かつ唯一正統な原子爆弾の被爆や被害の過去を記憶する貯蔵庫となったことを示していた。周知の通り、原爆ドームは1996年にユネスコの世界遺産として公認されており、「国民と人類が集散的に共有するカタストロフの遺産のために公的に選任された記憶の場」となっている。ただし、写真、絵葉書、模型、ニュースでのイメージを通してもっとも頻繁に再生産され広くいきわたってきたドームのイメージは、歴史的時間制の連続性をあいまいにし、被爆の「悲惨」を現在との連続として想定しにくい「過去」に属させてしまうという危険性があることもまたたしかである。この問題について米山は、ボードリヤールがディズニーランドにたいして行った考察を取り上げ、以下の考察を行っている。

ドームの人工的な保存、そして廃墟としてのドームの象徴的地位は、何よりもまず半世紀前の核の脅威との隔絶感を強める。そのときドームは、ポスト核時代に向けて、ボードリヤールのディズニーランドときわめて似通った役割を果たすようになるだろう。常に目の前にある本物のアリバイをもたらすのだ。訪問者に過去の本物らしさを保証しつつ、ドームは原爆による破壊が、そのむかし、この現場で実際に起こったことを確認する。(p. 113)

また目覚ましい復興をとげた広島市の空間という側面に注目する場合、平和記念公園に位置付けられた原爆ドームは、都市空間に明瞭なコントラストを描くようになった。その原爆ドームとは、今や世界遺産となり、「核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボル」と説明される存在である。こうした都市空間において、現実が、「人びとに今日の平和で繁栄したクリーンな世界を保証」しているという見方を生み出している。そして以下のようにとらえる。

破壊の記憶の封じ込めは、共時的な現実—すなわち、核の脅威は実はこのミュージアム化された場所の外側の

あらゆるところに存在しているかもしれないこと、つまりこの世界が核兵器によって徹底的に汚染されているかもしれないという現実一を覆い隠すのである。同様に、公的領域への編入を通して、ドームは最も大きな全人類の悲劇と認識されるものだけに焦点を当てるようになる。まるで、ありふれて明確に見えてはいないが同じくらいに危険な暴力行為がこの場所の外で起っているのに、それらは認められていないかのよう。 (p. 113)

本稿冒頭で確認したように、本書で米山は、この原爆ドームの補強工事のための募金活動が行われていた頃、その一方では破壊された建物をその廃墟の外観のまま保存することに生存者たちが強く賛同してはなかったという事実を指摘している。今日、原爆ドームを保存するということについては、誰もが賛成することがらであるが、過去を振り返れば、そのような認識は歴史的な一時点で生じたものでしかないことがこの事例で示されている。ただ終戦直後から原爆ドームは、そのまま残すのか、それとも取り払うのかという問題が生じていた。取り払いたいと希望する人びとは、惨事を思い出したくないという理由が圧倒的に多かった。これにたいして残したいと希望する人びとは、記念のためや、戦争のいましめととらえていた。これまでにみたように、「怒りのヒロシマ」を終戦直後の人びとの感情をあらすものとみる観点からすれば、ここでの「記念のため」に含まれた人びとの感情を推測することができる。つまり終戦直後、原爆ドームを残そうとするのは、これが原子爆弾の投下や戦争ということにたいする人びとの怒りや恨みの感情を込めるためのものと考えられたからではなかったか。このようなことにかんして、本書の中では明確にされてはいないが、米山が取り上げた「怒りのヒロシマ」は、こうした人びとの感情を含んだ内容で構成されていたはずである。

7. 破壊の記憶とものの文化遺産化

今日では高層の基町アパートが存在している爆心地近くは、もともと終戦直後から家のない人びとが自らバラックを建てて生活を送っていた「原爆スラム」と呼ばれる場所であった。そこにも人びとが生活する一つの社会が成立していたのだが、1968年10月から再開設計画が立てられ、バラックの立ち退きや撤去が行われるようになる。こうした都市計画の一端をなす取り組みが行われることにより、それまで存在していた社会は消滅した。ただこの一方で、わずかに原形をとどめた原爆ドームは保存の取り組みの対象となり、1967年に補強工事が終了した。こうした両者の事例は、荻野による「一方では忘れてしまいたいという思いが破壊や撤去という結果に至り、他方では記録や表現したいという思いが復元・再現や保存という行為に向かう」という表現が如実に指し示す出来事であった。

原爆スラムもまた戦争の記憶をあらわす存在であったにもかかわらず、原爆ドームが保存されたようには、その取り組みは行われなかった。米山のいう「記憶のポリティクス」という観点は、都市空間、式典、証言、慰霊碑、廃墟をはじめとする文化的編成物を足場に構成されていく社会の主流の見方、言説や記憶を批判的分析の対象とする。それらによって構成される「語りの空間」に注目することで、「二十世紀の輻輳する権力過程が、ときには矛盾しあいながら、記憶と忘却のせめぎあいの「場」を生み出してゆく、その諸相を浮き彫りにすることを試み」(p. vi) ようとする。その「語りの空間」をよく示す事例として、「気をつけてみると、鉄道駅の近くにある川岸のバラックの風景やホームレスの姿は、東南アジアみたい、香港とか。それともベニスかな」(p. 85) という語りがある。これは「広報部の二十代女性職員」が、かつて基町が原爆スラムであったという過去を知り、そ

れを評したものである。こうした言説から米山は、原爆スラムが基町再開発計画によって新たな都市イメージが作られた今日において、貧困の記憶さえもが日常風景がエキゾチックで刺激的なものとなる契機を生み出しうることを指摘するのである。

かつて基町地区に原爆スラムがあったという事実を人びとは忘れてはいない。しかしながら、現在の基町地区は、当時の惨状を人びとに想起させるようなものではない。つまり、同じ空間を見ても、現在における見方をもってそこを眺めることしかできない。こうした現状を分析するとき、米山は「記憶のポリティクス」という視座が有効であると考え。現実には、人びとがかつてそこに原爆スラムが存在していたことさえ忘れさせるような状況がこれまでに生まれてきたこともたしかである。そこに住んだ主な人びとは、戦地からの帰還者、経済的弱者、戦後の市の住宅事業から除外された人であったという。そのような人びとによって仮設住宅や違法住宅が作られ、生活の場、社会が形成されていた。こうしたことを想起するためには原爆スラムもまた、保存されるべきではなかったのだろうか。「怒りのヒロシマ」、「ヒロシマが廃墟と化している」という問題意識から広島現在の現在をとらえようとするとき、なぜ原爆スラムは撤去され、残されなかったのか、という新たな疑問が生じるのである。

かつて、終戦直後には「怒りのヒロシマ」と表象されるような空間があった。そこでは原爆ドームの廃墟が残り、原爆スラムが形成されていった。被爆者のみならず財産を失った人びとは悲惨な現実を生み出したすべてのものに怒りや恨みを持ってははずである。しかしながら結局、原爆ドームのみが残され、しかもそれは、今日、怒りや恨みをあらわすものとしてではなく、「核兵器廃絶と恒久平和を求める誓いのシンボル」として世界にひろく知れわたるにいたっている。過去の人びとの感情を表象していたであろう諸々の存在のうち、残されずに撤去・破壊され再開発のなかに消えていったもの、そして遺産として残されたもの、それぞれのたどった社会的過程を対象にし、今日において社会の主流となっている見方がいかにして生じてきたのかの論理を追及するのが、評者が携わっている「文化遺産化」の研究である。これまで見てきたように、このような研究の視座を形成するにあたって、米山の「記憶のポリティクス」ならびにその問題関心である「怒りのヒロシマ」は、尽きせぬ示唆を与えてくれている。

参考文献

- 林雅孝ほか編、1991『戦後広島都市診断—社会的・社会病理学的立場から』、ミネルヴァ書房。
萩野昌弘、2000「負の歴史的遺産の保存—戦争・核・公害の記憶」、片桐新自編『歴史的環境の社会学（シリーズ環境社会学3）』、新曜社、pp. 199-220。
大藪寿一、1968「原爆スラムの実態（上）」『ソシオロジ』、14巻3号（第48号）pp. 1-58。
———、1969「原爆スラムの実態（下）」『ソシオロジ』、15巻1号（第49号）pp. 84-104。
Yoneyama, Lisa, 1999, *Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory*, Los Angeles: University of California Press.

(はまだ・たけし 博士課程前期課程)